

「学習支援実践（インターンシップ）」の科目運営と学生の学び

著者	稲垣 忠
雑誌名	東北学院大学教育学科論集
号	2
ページ	11-23
発行年	2020-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024123/

「学習支援実践（インターンシップ）」の科目運営と 学生の学び

Course Management of “Practice in Learning Support (Internship)” and Students’ Learning Experiences

稲垣 忠

INAGAKI Tadashi

キーワード：学校インターンシップ，学校体験活動，学習支援，教員養成，科目運営

Key words : School Internship, School Trial Experience, Learning Support,
Teacher Training, Course Management

1. はじめに

教職を志望する学生が在学期間中に学校現場を訪問し，さまざまな経験を積むインターンシップは，教職課程をもつ多くの大学で取り組まれている。平成27年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では，教職課程の改善策の1つとして「学校インターンシップの導入」が提言された。「学校現場において教育活動や校務，部活動などに関する支援や補助業務など学校における諸活動を体験させる」ものとして学校インターンシップや学校ボランティアが上げられ，教職課程の学生の実践的指導力を高める意義が示された。その際，従来からの教育実習とは区別・役割分担を明確にした上で，大学や地域の実態に応じた実施となるよう，教職課程で一律に義務化することは見送られた。その後，平成29年11月に示された「教職課程コアカリキュラム」では「教育実習（学校体験活動）」として教育実習と関連する科目として補足的に説明されるに留まった。各大学で取り組みが多様化しており，独立した科目として明確化することが難しいこと，インターンシップの実施には，大学だけでなく，受け入れ校，教育委員会との調整が不可欠であり，地域の実情に合わせた運営が求められることがその背景にある。

インターンシップは，適切な時期に実施することにより，学生が自らの適性を考えたり，教職課程の中で何を学ぶ必要があるのかを見つめ直したりする機会になると考えられる。原（2018）は，学校インターンシップに取り組む学生を対象とした調査から，インターン活動の結果，教員採用試験への意気込みや理想の教師像に対する具体的な意識が高ま

り、結果として合格率の向上に結びついていることを指摘している。本稿では、東北学院大学文学部教育学科の2年次の科目として設置された「学習支援実践（インターンシップ）」の開設1年目の運用の実際を報告するとともに、学生の活動記録やリフレクションをもとに、インターンシップという学習経験がどのような意義をもつのかについて検討した。

2. 科目概要

東北学院大学文学部教育学科（以下、教育学科）の科目「学習支援実践（インターンシップ）」（以下、「学習支援実践」）の概要を述べる。まず、開講は2年前期である。本学では、教育実習は4年次に設定しているため、実習に行く前に履修することとなる。なお、1年次の「現代教職論」では「1日学校体験」として小学校を訪問し、担任教員のシャドーイングを行なっている。同じ1年次の「研究・発表の技法」（必修科目）では、小～高校の学校現場の授業や科学館等の社会教育施設でのフィールド調査を行なっている。つまり、「学習支援実践」は、学生にとっては3度目の学校体験と位置付けることができる。教育学科の専門教育に関するカリキュラムは、第1類（教育学）、第2類（児童教育）、第3類（英語教育）、第4類（異文化理解教育）、第5類（教職実践）、第6類（演習・総合研究）の6類から編成されており、「学習支援実践」は、第5類の最初の科目となる。第5類は12科目（すべて2単位）からの選択必修で10単位の取得を卒業要件である。

シラバスに記載された科目のテーマ、授業内容および達成目標を表1に示す。講義内容にある通り、本科目では小学校の教育現場へ訪問し、児童の学習支援に取り組むことをインターンシップとした。達成目標には、学級担任に関する一般的な理解とともに、児童との関わりについて、コミュニケーション面と学習面の2つの側面を設定した。

表1 「学習支援実践」のテーマ・講義内容・達成目標

テーマ	子どもの学びを見つめる目を鍛えよう
講義内容	<p>教育現場（小学校）に赴き、実際の業務を体験する機会を通して実践的指導力を伸ばします。学級担任の補助的な業務を通して教員の仕事について学ぶとともに、児童個別の学習支援を継続的に行い、ひとり一人の学習者が学ぶとはどういうことか、理解する、できるようになるにはどのような働きかけが必要なのかを経験します。本科目では、学校現場に訪問するまでのオリエンテーション、訪問しての支援活動（インターンシップ）、活動後のふりかえりと報告会を設定します。</p> <p>※本科目は学科学位授与の方針のうち「多面的な実践的指導力を身につけ、多様な児童生徒の一人ひとりに寄り添うことができる」に対応する。</p>
達成目標	<p>(1) 学校現場における学級担任の役割と業務内容を説明できるようになる</p> <p>(2) 児童との適切なコミュニケーションの基礎を身に付ける</p> <p>(3) 児童個々の学びを支援する方法を身に付け、実践できるようになる</p>

3. 科目運用

表2に15回の授業計画を示す。「学習支援実践」は講義と実習を組み合わせた2単位の授業である。7回分を講義にあて、ガイダンス、学級担任の業務、学習支援に関する基礎的な事項に関する指導や、中間報告会、最終成果報告会、ふりかえり等を行なった。なお、第3回のインターン活動の実際に関しては仙台市学生サポートスタッフ事業（後述）の説明会への出席と本科履修生向けのガイダンスを行なった。残り8回分をインターンの活動として、90分の活動とそれに関する毎回の準備およびふりかえりを1回分として設定した。

インターン先を確保するにあたり、仙台市教育委員会の「仙台市学生サポートスタッフ事業」（以下、学生サポート事業）と宮城県教育委員会による「学び支援員派遣事業」（以下、学び支援員事業）の協力を得た。学生サポート事業は、本学を含む仙台市教育委員会と提携を結んでいる大学の学生を対象に、市立幼稚園、小・中・中等教育学校、高等学校でのボランティアを紹介している。平成29年度の派遣のべ人数は595名にのぼる（仙台市教育委員会2019）。活動内容は「一般ボランティア」（教科、総合、情報教育、図書館での指導補助、休み時間や放課後の話し相手）、「にこにこボランティア」（小学校での支援が必要な児童に対する継続的な支援）、「すくすくボランティア」（保健管理等に関わる養護教諭の指導補助）の3種類がある。本科目ではこれらのうち、一般ボランティアと、にこにこボランティアを活動対象とした。宮城県教育委員会による「学び支援員派遣事業」は県内の市町村教育委員会に委託され、「学び支援コーディネーター」が企画する市町村単位の学習支援に参加するものである。対象は小中学生だが、活動場所は学校に限らず公

表2 「学習支援実践」の運用

回	日	内容
1	4/9	オリエンテーション（運営方針・活動計画書のガイダンス）
2	4/16	学級担任の業務に関する講義
3	4/22	インターン活動の実際および留意点に関する講義
4	5/14	学習計画書の提出・多様な児童との関わりに関する講義
5～8	各自	インターン活動
9	6/25	中間報告会の実施
10～13	各自	インターン活動
14	9/10	実践報告会の実施
15	9/10	報告会および授業全体のふりかえり

民館等を会場にする場合もあり，夏休み等の長期休暇期間中に実施されるものが多い。いずれの事業も東北学院大学教職課程センターが本学における連絡調整窓口となっているため，教育委員会への申請等は教職課程センターを通して行い，その経過を授業担当者に連絡しながら進めることとした。

図1に学生の活動全体の流れを示す。①のガイダンスは4月22日に仙台市教委による「学生サポート事業」の説明を全員で受講した。「学び支援員事業」の説明会は6月11日に実施予定だった。そこで，②の活動計画書は5月の時点で「学生サポート」「学び支援員」のいずれを希望するか一旦提出し，その後の学校，自治体からのボランティア募集の情報提供を待って，学生自身が時間割や居住地等の都合に応じて活動場所を選択した。希望に合った活動場所が見つかった時点で活動場所を授業担当者および教職課程センターへ報告し（④），活動を行なった。なお，活動期間は5月後半から8月までとした。6月25日の中間報告会（⑦）は既に活動をはじめている学生と，夏休み中の活動を予定しており，まだ活動をはじめていない学生が混在している状況となった。⑨の活動報告会は夏休み中の活動が終わる9月10日に設定した。前期科目の期間からは外れるため，学事課と調整し，成績提出を遅らせる措置を講じた。なお，「学び支援員」の活動は，夏休み期間中であり，公民館等が活動場所となるため，達成目標「（1）学校現場における学級担任の役割と業務内容を説明できるようになる」に直接対応しないが，講義で補うこととした。

4. 履修状況・活動状況の実際

学生の履修状況を述べる。「学習支援実践」の科目登録を行なった学生は13名だった。

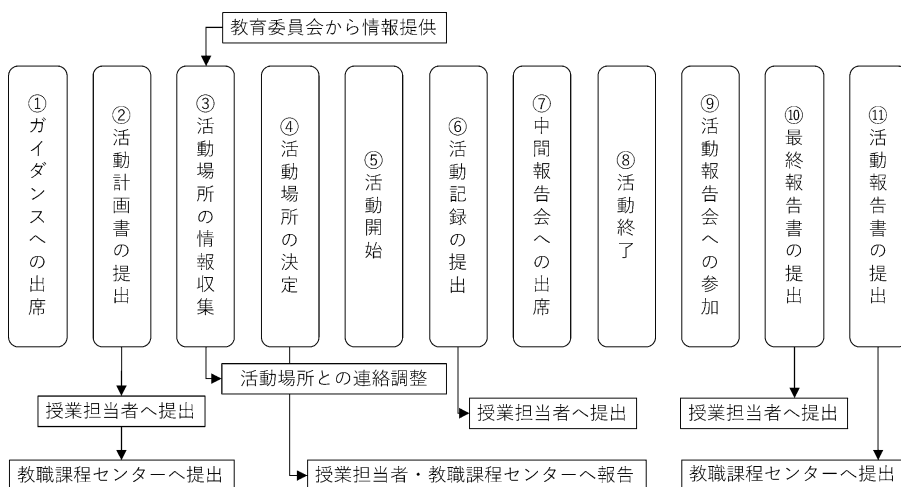


図1 学生の活動フロー

2018年度の教育学科入学生は52名であり、ちょうど4分の1が履修したことになる。学生に配布している履修モデルに記載していること、第5類の最初の科目でもあり、開講前には多数の履修希望があることが想定されていた（2018年9月に希望調査をした際には30名程度の履修希望があった）。一方、2019年春時点で小学校教員を志望している割合がそれほど高くないことや、インターンの活動期間が授業期間中と重なったことや、時間割の都合がつけられない学生も少なくないため、この受講者数になったと考えられる。なお、学生によっては1年次の段階から学生サポート事業を活用し、ボランティア活動をしてきた学生が含まれる。

表3に受講生の活動場所・活動期間、参画した事業の対応を示す。学生はA～Mと表記することとする。学生サポート事業では仙台市内の3つの小学校の協力を得た（以下、ア～ウ小と表記する）。学び支援員事業では県内の2カ所の自治体（それぞれ、「あ市」「い市」と表記する）での学習支援活動に参加した。ア～ウ小で活動した学生はア小で5名、ウ小では1名とばらつきがあるが、これは学生それぞれの居住地等の都合により、本人が通う先を選定したことによる。学生LおよびMは、2つの自治体で学習支援活動に取り組むことで8回分の活動時間を確保した。また、学び支援員事業では実施自治体によって、小学生、中学生のいずれかのみを対象とする場合、小中学生両方を対象とするなど実施形態が異なる。学生J～Mは小学生対象の教室がある自治体に申し込んだが、中学生の学習支援をする場合もあった。

表3 学生の活動場所と期間

学生	活動場所	活動期間	事業
A	ア小	6/11～7/9	学生サポート
B	ア小	6/11～7/2	
C	ア小	6/10～7/8	
D	ア小	6/10～7/8	
E	ア小	6/11～7/2	
F	イ小	6/25～7/9	
G	イ小	6/25～7/9	
H	イ小	6/25～7/9	
I	ウ小	5/23～7/9	
J	あ市	8/6～8/8	学び支援員
K	あ市	8/6～8/8	
L	い市・あ市	8/16～8/23	
M	い市・あ市	8/16～8/20	

5. 活動記録の分析

5.1 活動計画書

学生には5月の時点で活動計画書を提出させた(図1の②)。計画書には、①昨年度の活動経験、②活動可能な時間帯、③訪問希望先、④支援できること、⑤現時点での不安・質問、⑥本科目で何を学びたいかの6項目を記入させた。③は学生の居住地近くを挙げたものがほとんどだったため、ここではそれ以外の項目について結果を示す。

昨年度の活動経験は13名中4名が経験者だった。1年生の時点で仙台市の学生サポート事業の参加者、小学校外国語活動ボランティア活動、被災地での学習支援等で活動経験のある学生の存在が確認された。活動可能な時間帯では本学の時間割の時程を基準に月曜から土曜まで尋ねた。学生によって差はあるものの、終日活動可能な日は土曜に限られた。終日の活動あるいは移動も含めると1日がかりになる場所では事実上、活動は難しい。小学校で授業時間帯にあたる9～15時の間で学生が可能だった活動時間は月曜・火曜の午前か、本学の1校時(8:50～10:20)のみがほとんどだった。

「支援できること」では、授業中の学習支援の他、休み時間の遊び相手、教員の仕事のサポート等、児童および教員に関わることへの期待・意欲が見られた。一方、「不安・質問」については、ほとんどが活動時間、場所の確保に関するものだったが、トラブル対応など具体的に活動をイメージした不安の声もあった。

「本科目で何を学びたいか」については各自800字程度を記入させた。これらの記述に対して希望する学習内容ごとにカテゴリの生成を試みた。その結果、「教員の技術」「児童との関わり」「学習支援の方法」「児童の実態」「教員の意識」の5カテゴリが抽出された。表4に受講生と選択したカテゴリの関係を表にして示す。多くの学生が「教員の技術」である教師の振る舞い方、学習指導の実際に興味を示していた。

表4 活動計画書の記述「学びたいこと」

例		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	計
教員の技術	授業の進め方、指示の仕方、授業準備	0	0	0	1	1	1	1	0	1	2	1	2	2	12
児童との関わり	コミュニケーションのとり方、褒め方、叱り方	1	1	0	0	1	1	0	2	1	0	1	0	1	9
学習支援の方法	児童個々にあった支援の内容や方法	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	3
児童の実態	遊び、生活、給食など学校生活での児童の様子	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3
担任の意識	教師の言動、意識、専門性	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2
合計		2	2	1	2	2	2	1	3	3	3	2	3	4	29

5.2 活動記録

受講生は、活動ごとに LMS（学習管理システム）の manaba 上の掲示板に活動記録を報告した。掲示板はすべての受講生に公開されているため、学生はそれぞれの進捗状況や学んだことを確認しながら活動することができた。活動記録は、① 訪問日時、② 活動内容、③ 活動の際、留意・工夫したこと、④ 学んだこと、⑤ その他（質問等）の 5 項目とした。ここでは、「活動内容」「学んだこと」について活動計画書と同様の手続きでカテゴリを作成した。なお、1 名、記録が提出されなかった。

活動内容についてカテゴリ生成した結果を表 5 に示す。授業時間中に机の間を回り、教員の指示に対応できていなかったり、補助が必要な場合などに対応する「机間巡視」がもっとも多く、次いで児童個別の学習相談に対応する「個別支援」が続いた。「ふれあい」は休み時間に教室や運動場で子どもと遊ぶ経験についてである。一方、「飛び出し対応」は授業時間中に教室の自分の席で座っていることが難しい児童に対して声かけや見守りなどを行った。「担任補助」は運動場の準備や図画工作等で、教師の授業や教材の準備に関わる補助業務である。L 氏は学び支援員として活動していたが「運営補助」として、夏休みの学習教室での受付業務などを行った一方、「アドバイス」として教室運営をしている教員から学習支援に関する助言が毎回あったことを報告している。その他、「児童付き添い」は児童会等の児童の活動に付き添う機会や、「保健室」は、子どもの怪我への対応がある。

表 4 と比較すると、授業の中での教員の技術や子どもとの関わりに関して「机間巡視」「個別支援」「ふれあい」等で対応できたため、多くの学生にとって想定していた活動を行うことができたと考えられる。一方で、「飛び出し対応」「保健室」など、事前に想定が難しかった場面もあり、特に A 氏、C 氏は自分の席に座ってられない児童への個別対応に関する活動がもっとも多い結果となった。また、学生サポート事業により小学校で活動し

表 5 活動内容

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	L	M	合計
机間巡視	9	3	8	8	7	6	4	7	1	6	8	7	74
個別支援	9	3	8	1	5	5	6	6	5	6	8	7	69
ふれあい	8	5	6	4	2	1	1	0	0	0	8	0	35
飛び出し対応	9	3	8	2	2	0	1	0	0	0	0	0	25
担任補助	0	1	8	0	3	0	2	1	4	0	0	0	19
運営補助	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	1	8
アドバイス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	8
児童付き添い	3	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	6
保健室	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
合計	38	15	38	16	19	13	15	14	12	12	39	15	246

たA～Iと、学び支援員として夏休みの学習支援を行ったJ～Mとでは机間巡視、個別支援といった活動内容は共通するが、授業場面での机間巡視と自習的に学んでいる場面での机間巡視とは異なる経験となる。

次に、活動記録の中から「学んだこと」についても同様の処理を行った結果を表6に示す。学生によって8件から36件と書き方に差はあるものの、授業や個別指導の場面での教員の指導技術（発問、指示の仕方、児童の発言への対応、児童の状況把握の仕方等）がもっとも多く、表4の「学びたいこと」に対応できていたと判断できる。次に、「注意の仕方」「褒め方」「関係構築」など関わり方に関する項目が並んだ。3つを合計すると「指導技術」を上回ることになるが、「注意の仕方」「褒め方」は関わり方に関する技術とも言える。表4の2番目に位置づけられた「児童との関わり」についても、多様な関わり方を学んだと言えるだろう。「児童の個性」は特に支援を必要とする子どもへの個別対応の活動を多く担当したA～Hまでの学生に集中し、教室全体の様子を観察しながら必要な支援を行っていたJ～Mの学びは「児童の観察」とラベルをつけた。「教師の役割」は、「私たちは先生に対してなんでも助けてくれる先生というイメージでいたが、実際は1人でやれるようにアシストを行なっているのだと改めて感じた(F)」のように、具体的な指示や関わり方ではなく、その意図や目的について記述しているものを取り上げた。

5.3 ふりかえり

第14回、第15回の授業の後、特にインターンシップ活動全体に対する振り返りとして、(1)活動を通じたあなた自身の成長・学び、(2)活動を通して感じたあなたの今後の課題、(3)活動および観察を通じて学んだ「教員の役割とは何か」の3点の問いを示し、1,200字程度のレポート課題を課した。以下、問いごとに記述の抜粋を示し、考察を加える。

表6 学んだこと

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	L	M	合計
指導技術	4	5	0	1	7	6	5	5	5	3	22	3	66
注意の仕方	1	1	8	8	0	1	2	3	1	0	1	1	27
褒め方	1	1	8	8	2	0	2	0	1	0	0	0	23
関係構築	2	3	0	0	1	0	0	2	1	2	6	2	19
児童の個性	2	1	6	1	2	2	3	2	0	0	0	0	19
児童の観察	0	0	0	0	1	2	4	1	0	3	3	3	17
教師の役割	0	3	0	1	1	2	0	2	0	0	4	1	14
安全管理	2	0	0	0	0	1	3	1	0	0	0	0	7
合計	12	14	22	19	14	14	19	16	8	8	36	10	192

(1) 活動を通した成長・学び

この問いは、前節の活動記録の中にあった「学んだこと」の中から特に印象に残ったものを抽出している学生が多い。そこで、表6のカテゴリを手がかりに分類・整理を行い、「指導技術」「児童理解」「教職理解」の3つに集約した。表7は3つのカテゴリに関連する部分を学生順に抜粋したものである。

「指導技術」では、ICTの使い方、具体的な指示の出し方、ほめ方、学習状況の観察の仕方など、具体的なふるまいについての記述があった。履修学習は同じ2年前期に「教育方法」（教職課程の「教育の方法及び技術」に対応）を履修しており、そこでの学びと実際の体験とが結びついたことで、学べた実感を深められたと考えられる。「児童理解」については、特に個別の児童との関わりを通じて得た気づきである。教育実習のように教師として授業を計画、実施するのではない、児童ひとり一人の学習支援に特化した活動ならではの気づきと言えるだろう。「教職理解」は学校全体や教師という仕事に対する気づき

表7 活動を通した成長・学び（抜粋）

<p>(指導技術)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実物投影機を用いることで、教科書を忘れたり、開いていない児童が授業についていきやすくなった。地域と学校の連携として、企業の方から清掃について学んだりしていた。大学の講義と結びつけることでより理解が深まった。(B) ・発達段階に応じて指示の仕方が変わること。1年生ではお便りをファイルに入れる、筆箱と教科書を出す等の基本的な動き方から指示していたが、学年が上がるにつれて、なぜその行動を行うのかを児童に考えさせる指示が増えていくことに気づいた。(E) ・机間巡視をしていく中で、想像以上に子供たちの進み具合がそれぞれで違い、どうすれば進度をそろえられるかを考えた。(G) ・褒め方と注意の仕方を学んだ。掃除中に遊んでる児童に対して注意をしたが、その後、掃除をした児童に褒める言葉をかけることで向上心ややる気に繋がる。褒めと注意は反対の位置にありながらも使い次第で相補的な関係があることを学んだ。(I) ・中学生は小学校から積み上げてきた力などの差が生じており、生徒1人1人にどのように説明したらわかりやすいのかを深く考えた。自分の中の当たり前が当たり前でないことに気づかされた。(J) ・机間指導の際、児童生徒の解答を見て答えにたどり着く過程を瞬時に理解し、分かりやすく指導しなければならなかった。学問知識を身に付けただけで、多くの経験を積むことが大切である。(L) ・机間指導の際、現役の先生が大きめの付箋を持ち歩き、それに書いて教えると、計算過程や考え方を生徒のノートに残したりでき、気軽に持ち歩き指導することができるので真似したい。(M)
<p>(児童理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「待つ教育」が必要であることを学ぶことができた。教員は児童に積極的に関わることで教育を行うことが何より大切だと考えていました。しかし、焦らずに見守ることも必要だと気付いた。児童の意思やその行動の意図を読み取る、児童理解のヒントを得られた。(A) ・授業の際、教室にすることが出来ず、廊下に出て遊んでみたり、階段の手すりやロッカーの上など高いところに登ってみたりと落ち着きのない児童がいた。先生方は「どうしたの？何かあったの？」と声をかけていたことに気付く、児童の意図を汲み取りよく話を聞くことが大切であると実感した。(C) ・こちらから声掛けをすると質問してくれる生徒が多く、手を挙げていなかっただけで本当はつまづいている点が多くあることを知った。質問しやすい環境を作ることも教員の重要な仕事である。(K)
<p>(教職理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校全体で児童をサポートしていくことが大切。本当に児童たち一人一人の個性は様々で、特別に支援の必要な児童がいるクラスもあった。脱走してしまう児童に合わせるだけでは学級経営は成り立たないことを目の当たりにした。教員同士で協力し合うために日々の情報交換はとても重要。(F) ・小学校教員の多忙さ。朝は児童よりずっと早く出勤し、職員会議で児童への伝達事項や予定を全て頭に入れ、朝の会で児童の健康や提出物をチェックし、一日の全科目の授業や給食指導や掃除指導をひとりで行う先生の姿を目の当たりにして、小学校教員への認識の甘さを実感した。(D) ・現場の教師にあって自分には足りないもの、「体力」と「聴く力」に「広い視野」、これらの3つが重要であることに気付くことができた。(H)

である。多様な児童への対応は学級担任1人でカバーすることは難しい。学級担任、他の教員と協力して対応している中に支援する立場として入ることにより、学校が多くの教員・スタッフの連携によって機能している「チーム学校」を実感したとの声があった。他にも、教員の多忙さ、大変さを実感することで身につけるべき資質や自身の教職への適性を考え直したという意見もあった。教育実習前に教員の仕事を観察、支援できることがインターンシップの良さではあるものの、教職に向けて十分な学修が行われているとは言い難い段階で厳しい現状を知るとは、教師を目指す上での自己効力感を低めてしまう側面がある。

(2) 活動から感じた課題

インターンシップ活動の経験の結果、教師を目指す上で高めていきたい資質・能力についてたずねた(表8)。もっとも多いのが、「子どもとの関わり」である。子どもとの関係の築き方、ほめ方、注意の仕方、子どもどうしのトラブルへの介入など、少ない回数のインターンは教師のやり方を真似たり、試行錯誤したりしているうちに終わってしまう。「これから積極的に学習ボランティアなどに参加していく必要がある」のように、今後のボランティア活動継続への動機づけになったという意見が見られた。「学習指導」は特に学び支援員として個別の学習支援に従事した学生から得られた。インターンシップは教育実習

表8 今後の課題(抜粋)

<p>(子どもとの関わり)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童を褒めるにも叱るにも、毎回似たような言葉しか掛けることができず、自分の言葉のパワー不足を痛感した。児童の心を動かすような言葉を考え、先生の児童への声掛けに注意して活動した。(A) ・教師には指導に必要な知識だけでなく、柔軟かつ臨機応変に対応できる力や児童のすべてを受容する力が必要と感じた。積極的にボランティアに参加し、現場で多くの児童と関わって身につけたい(C) ・支援を必要とする児童への対応が不十分だった。怒られることに慣れてしまっているようで誰に注意されても聞く耳を持たない児童がいた。講義や自分で情報収集していく必要がある(D) ・児童を観察する力が足りない。ひとりひとりに対する適切な指導を変えるには、それだけ児童のことを理解しなくてはならないし、理解するために情報共有だけでなく観察力が必要になってくる。(E) ・広い視野をもつ必要がある。いじめや、体調不良の早期発見、児童の長所短所を見つけ、心身ともに成長することを補助できるからである。児童の些細な違いにも気づけるようになりたい(H) ・生徒と距離を縮めるコミュニケーションの取り方や、注意するときの言葉選びや褒め方を学びたい。机間指導の際、中学生が気軽に質問できないのは、関係性が築けていなかったのではないかな。(M) ・現場に行ってみて、今までの人生の中で接したことのない児童たちと関わる機会が多くあった。これから積極的に学習ボランティアなどに参加していく必要があると感じた。(F)
<p>(学習指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・たくさんの知識を身に付ける必要がある。1つの問題を解くにも、さまざまな能力や知識が必要であり、複数の解法を瞬時に思いつくには、多様なものの見方も必要(J) ・ボランティアを継続しながら瞬時に分かりやすく教える力を身につけたい。生徒からのアクションを待つだけの教員ではなく、こちらから生徒に変化を与えられる力を持った教員になりたい(K) ・生徒にどこまでかみ砕いて説明したらよいか不安で、自信をもって教えることができなかった。子供たちの様子を見ながら、子供たち自身に「分かった」という実感を持たせられるようになりたい(L)
<p>(学校現場の理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の目で様々な現場を訪問し、実態を知りたい。そうすることで自分の指導する際のアプローチが増えると思う。学校や地域の違いを知り、適応能力を身に付けたい(B) ・一年を通した学級の雰囲気づくり、授業づくりを観察したうえで具体的な特定の児童への対応を考えることが課題だと思いました。(G) ・ボランティアで学べる実践的な知識と大学の講義で学べる学問的な知識をどのように自分の知識として落とし込んでいくか。ボランティアに継続的に参加し、小学校の先生になる志を高く持ち続けたい(I)

のように授業をする訳ではないものの、個別指導の経験を通して、児童の理解に即して説明・指導の仕方を工夫することや、児童の理解状況を即座に把握し、さまざまな疑問に応えるために教科内容を幅広く・深く学ぶことが重要とする声があった。「学校現場の理解」はインターンシップを経験したことで、経験の中だけでは学べなかった学校現場への関心の広がりと言い換えることもできる。一人ひとりの子どもの育ち、学級集団としての成長は、年間を通して関わらないと実感することは難しい。また、訪問した学校は多様な学校の中の一事例であり、自身の被教育経験と少しの訪問経験から相対化することは難しく、大学での学びを含めさまざまな学習機会をとらえて自己の経験を価値づけていくことへの意欲の現れとみることもできるだろう。

(3) 教員の役割とは何か

最後に、インターンシップでの自身の活動や教員の観察を通して「教員の役割」についての見解を尋ねた（表9）。活動場所を含めて多様な活動経験を反映して、教員イメージにも広がりが見られた。「子どもの自立を支援する教師」は、学生自身の子どもの関わりの中から、一人ひとりの学びに向き合い、できるようになることで手離れする経験の繰り返しを通して、目指す子どもの姿として「学習者としての自立」がキーワードになったと考えられる。「支援者としての教師」では、より教師側の姿として、指導だけではない、見守る、待つといった役割への気づきと捉えることができる。「学習指導のプロ」としての教師は、教科内容の専門家として、子どもが理解し、できるようになるまでのプロセスに着目した表現と考えられる。一方で「集団生活を支える教師」は、担任として学級経営を行いながら個々の児童の成長を促す社会的に側面への関心が窺える。その他、教師の模範性、あるいは同僚性に着目した教師像へ言及する意見もみられた。

6. まとめ

学生が学校現場に一定期間訪問し、さまざまな支援活動を体験するインターンシップについて、その科目「学習支援実践（インターンシップ）」の運営の実際と、学生が得た学びについて報告した。学科開設2年目、本科目は1年目の記録であり、担当教員にとっても受講生にとっても模索と試行錯誤の連続だった。得られた学生の学びと科目運営上の課題点について整理し、まとめとする。

本科目を履修した13名の学生は全員、仙台市内の小学校や県内自治体において学習支援活動に従事することができた。計画当初、学生が学びたいと考えていた「教員の技術」や「子どもとの関わり」は本科目の目標に合致するものである。訪問先によって活動の期間や活動内容は多様なものとなったが、これら2点だけでなく、安全管理や特別支援、教

表9 教員の役割（抜粋）

<p>(子どもの自立を支援する教師)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が社会に出た時に通用するように学びの補助をすること。自立した学習者となれるよう、基礎としてドリルやノート指導。協調性やコミュニケーション能力の育成。人格の形成を担っている (B) ・知識を教えるだけではなく、勉強の仕方、物事の考え方、社会での生き方など、方法を教えること。その方法を児童それぞれが学び、実践することで、児童が社会の中で生きていけると思う (G) ・生徒が自分自身で成長できるようなきっかけを作ること。教え方はもちろん、自主的に学力を上げることにつながるような環境を作ることがあげられる (K)
<p>(支援者としての教師)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「児童にとって善い教育とは何かを考え、児童の学びのサポートを行うこと、児童の手本であること」児童の心身の成長をサポートするには、積極的に関わることと時に一歩下がって見守ることも重要 (A) ・今まで教員は子供たちの先頭に立って導いていくものと思っていた。しかし、今回の活動を通して活動する子供たちを陰ながら支えてあげることが本当の教員の役割だと考えるようになった。(F)
<p>(学習指導のプロ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あらかじめ複数の知恵や知識を身に付けて生徒からの質問に答えることができるように準備し、生徒が主体的に勉強に取り組めるような環境を維持すること (J) ・児童生徒に分かったという実感を持たせること。学習面や生活面の「なぜ」という疑問に対して教員はただ答えを出すのではなく児童生徒に分かるよう説明し、理解するよう働きかけることが必要 (L) ・児童生徒が勉強できる環境を作り出してあげること、気持ちを尊重した指導を行うこと、答えではなく、答えまでの道のりを理由とともに教えてあげること (M)
<p>(集団生活を支える教師)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業はもちろん集団で生活するルールやマナーを身につけさせること。授業時間を削ってでも、注意しなければいけない時がある。「できて当たり前のこと」を教えることに力を注がなければならない (C) ・集中して授業を受けられない児童や、友達との人間関係に悩む児童に出会った。悩みに耳を傾け、味方になり、児童一人一人が安心して学校生活を送れるようにするのが教員の役割。(D) ・児童が学校生活ないしは社会に出てからの活動に困らないよう集団での生き方を学ばせる。教員は、人格形成に大きく影響を及ぼす小学生時代をどう過ごさせるのか、生き方の根底を教える役割がある (E)
<p>(その他)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師は児童生徒たちの手本である必要がある。身だしなみや言葉遣いは正しく、法律やルールも遵守することが重要だと気づいた (H) ・先生の得意分野や苦手分野はそれぞれ違うことが多く、お互い協力して教育活動を行うことは教員の役割であるとともに児童の教育と教員どちらにとっても良いことだと感じた。(I)

職員間の連携の実際など、実体験を通して多様な学びを得ることができた。また、この経験を通してボランティア活動を継続することへの意欲や、他の学校等の教育現場の多様性への関心、大学での教育や教科の指導内容に関する学習への意欲等、履修生の今後の活動にいっそうの期待がもてる成果を得ることができた。一方、課題点としては特別な支援を要する児童への対応や安全管理については最低限の事前指導にとどまったため、戸惑いや負担感を感じる声も聞かれた。2年生の前期というカリキュラム上の段階の学生にとって無理のない活動内容となるよう調整することや、本科目やそれ以外の科目での指導内容を手厚くするといった対策が考えられる。

科目運営上は、教職課程センターとの連携のもと、仙台市教育委員会の「仙台市学生サポートスタッフ事業」と宮城県教育委員会による「学び支援員派遣事業」の協力を得て実施した。具体的な活動に関する学校現場や自治体からの要請通知が増えてくるのは6月に入ってからだった。活動開始まで時間を要した学生も少なくない。本科目を前期科目から

後期科目へと振り替えることができれば、日程的には余裕をもって実施できる可能性がある。また、学生の時間割では月曜あるいは火曜の午前中以外は、小学校の時間割にあわせるとほぼ活動できない状況だった。大学側で4～5校時に学内で履修する科目を割り当て、1～3時間目をインターンシップを含めた学校外でのさまざまな体験的な学習を含む科目を割り当てる、あるいは学校外の学修に従事する曜日を確保するなどの時間割編成を工夫することも、教員養成に重点を置く本学科の特色をより伸ばしていく上で必要な方策と考える。

謝辞

本論文が対象とした科目「学習支援実践（インターンシップ）」の実施にあたり、履修学生がお世話になった仙台市内の小学校および宮城県の協力自治体の関係者様に感謝申し上げます。また、東北学院大学教職課程センターには、運営上の協力だけでなく、さまざまな助言を得ることにより、円滑に科目を運営することができた。記して感謝の意を表す。

参考文献・引用文献

- ・中央教育審議会（2015） これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について ～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて
- ・文部科学省（2017） 教職課程コアカリキュラム
- ・原清治（2018） 学校インターンシップ参加学生のキャリア意識，小林隆・森田真樹（編）教育実習・学校体験活動，ミネルヴァ書房，pp. 167-184